

北大ポプラチェンバロ製作顛末記

チェンバロ作家 横田 誠三

"Boys, be ambitious!" クラーク博士の言葉で有名な札幌農学校 = 現北海道大学のポプラ並木が、2004年9月、台風18号による強風で多数倒れたことをご記憶の方も多いと思います。同大学の平井卓郎教授の指揮のもと進められたポプラ並木修復の大きかりな作業も一段落し、大きな被害を出したエルム等、学内の木々もようやく平静を取り戻したようにみえます。

倒れたポプラ(セイヨウハコヤナギ)でチェンバロを作ろうではないかという話は、北海道教育大学旭川校の市川信一郎教授(現在は岩見沢校に転任。音楽学)の御発案によるものです。バロック時代にチェンバロの材料としてポプラ材が使われたことを、よく御存知だったのです。筆者とは30年来のおつきあいなのですが、とにかくすぐに来て材を見てほしいという、突然の電話でした。

同年10月25日、旭川郊外の田野木材の製材場に赴き、早くもみぞれの降る寒さの中、北大から提供された7本の倒木ポプラと対面しました。太いものは80センチを越える見事なものでしたが、畏れていた通り、複雑に枝を伸ばした凸凹のある丸太です。末口から見ると普通の年輪があるのですが、元側は年輪が5つも6つも渦を巻いているというシロモノでした。

チェンバロは大きな楽器ですから材も大きなものを必要とします。中でも楽器の側板のうち、演奏者から見て右側の曲がった部分(ベントサイド)は曲げ木加工をしますから、節や欠点、目切れの無い、芯や白太を除いたできれば柾目の材が欲しい。厚さは仕上がり6ミリ程度(厚板構造の様式の楽器の場合でもせいぜい18ミリ程度)と薄いのですが、幅は20センチから25センチほど、長さは2メートルほど必要です。他の部分の材料も、弦の張力を受け続ける楽器ですから同じような良材が要求されま

す。北海道でも数少なくなった大型の手動の製材機を現役で稼働している、田野さんの細心の挽き割り作業と、欠点の除去作業をしていただいた結果、チェンバロ2~3台分を見込める材料を奇跡的にとることができました。

『台風で倒れたかに見えたクラーク博士の志の象徴が、チェンバロという形で不屈の志を受け継ぎ、このゆかりの地で生き続けることができれば素晴らしいことだと思っています。また日本では普段は粗末にあつかわれているポプラ材が、大事に扱うことによって決して劣悪な材ではないことを判ってもらい、その価値があらためて見直されていく端緒となることを同時に望んでいます。(横田)』

さて材はその後旭川の竹内木材工業に運ばれ、普通の倍以上の密度で棧を入れての丁寧な棧積み、必要最低限の期間の自然乾燥を経て、入念な人工乾燥を施していただきました。木材関係の方は御存知の通り、ポプラ材は「マッチ軸木、チップ材」というのが通り相場で、以前は道内では下駄(おそらく安物の)を作ったこともあるそうですが、これほどの技術力と手間をかけていただけたのは、やはりクラーク博士の言葉に触発された関係者一同が「大志」を抱いてしまったからにほかなりません。



工房に運び込まれた北大ポプラ材とハルニレ材

翌05年8月末、車で新潟一小樽フェリーに乗って訪旭。炎天下の竹内木材の片隅で製作に必要な材を選び、工房に持ち帰りました。嬉しいことに、北大ポプラから厳選された部分は、軽さと固さのバランスが楽器用材としてまあ理想的な感触、往時のヨーロッパの名工達が好んで使ったポプラと大変よく似た材に仕上がっていたのです。

旭川に残してきたポプラ材、その多くは節などで幅や長さが足りずチェンバロにはならなかった部分は、記念のオルゴール(曲目はなんと北大寮歌「都ぞ弥生」)になったようです。また同じ台風で倒れた「北大のハルニレ」もチェンバロのスタンドを作るために製材して持ち帰りました。

ところで製作中、製作後のマスコミ各社の取材時の質問で一番多くまた返答に困ったものは、質問としてはごく当然のように見えるのですが「普通、チェンバロは何の木を使うんですか?」「こんどのポプラ材のチェンバロの音はどうですか?」というもの。

チェンバロはおよそ1500年ごろまでに誕生し、ルネッサンスからバロック、そしていわゆる前古典派の時代に活躍しました。1700年ごろに誕生した発音法を「はじく」から「たたく」に変えた「ピアノ」に道を譲り、およそ1800年ごろ、モーツァルトが活躍した時代に滅んだ楽器です。期間にして300年、しかもヨーロッパ各地で、それぞれのスタイルで製作されたのです。したがって一口にチェンバロといっても多くの(ごく大まかに言っても10種以上の)「様式」の楽器が存在し、「ふつうのチェンバロ」というのは存在しないのです。またチェンバロはかなり大がかりな仕掛けを伴いますから、1台の楽器にもさまざまな木材を適材適所、使わざるをえません。それでも、ごく簡単に答えれば、今回ポプラを使った部分を「ふつう」何の木で作るかといえば、外側はイトスギ、シナノキ、ポプラ、クルミ、オークが代表的、底板はモミ、マツ、ポプラ、イトスギが代表的。今回の楽器では他に、響板がドイツトウヒ、駒がカエデ、ピン板がマカバ、鍵盤がスプルス、白鍵がツゲ、黒鍵がコクタン、ジャックがヨウナシ、タンクがヒイラギ、レジスターがシュウリザクラ...



リュッカーズ様式のチェンバロ(横田誠三作)

ポプラをもっとも重用したのはアントワープのリュッカーズ一族。チェンバロのストラディヴァリといわれています。ポプラといってまず思い浮かぶビッグネームです。

しかしながら彼等の作り上げたチェンバロの様式は、素材をすべてペンキと壁紙で覆ってしまい、ポプラの地肌は見えません。そのうえチェンバロの歴史としては初期の頃に活躍したため、音域が狭く(後の時代に改造拡大されましたが)演奏可能な曲が少ないのです。これは困った。

次に浮かぶビッグネームは、バルトロメオ・クリストーフォリ。なんと「ピアノ」の発明者としてのみ有名ですが、あのメディチ家お抱えのすばらしいチェンバロ製作家です。ポプラを重用しました。またイタリアのチェンバロは一般に樹の地肌を生かした仕上げが基本です。今回の要請にはこの様式がよさそうだと決めるまでたいへん悩み、そして最後の仕上げにいたるまで、どのような様式感の楽器にするか悩み続けたといっても過言ではありません。

だから「普通チェンバロは何の木でできているん

ですか?」と気軽に訪ねられると、腹立ちを押さえられない時さえあるのですよ。また「音はいいですか、どうですか?」ってきかれても、まず様式によってめざすところは違うし、1台1台が個性ある「楽器」ですし、それにたいしてはそんなにうまくいくわけじゃないですから、困ります。

ともあれイタリアの製作法にのっとって製作は進められました。



まず初めに底板を作り、図面通りに成形した上に、土台となる部材を取り付けます。アリホゾを駆使して膠でしっかりと取り付けます。



骨組みができて、まわりに側板をはりつける直前の様子です。ここに使われている材料はピン板(画面手前側の長方形の部分)をのぞいて、すべて北大のポプラ材です。左側壁際の大きな板がスパイン、右側の曲がった板がベントサイド。この大きな2枚の板が無垢でとれるかどうか製材の眼目、ワカレメでした。



本体枠組みと鍵盤がほぼ出来上がって、だいぶ楽器らしくなってきました。イタリア様式ですから白鍵はツゲ、黒鍵は黒檀です。左の壁に立てかけてあるのは、横接ぎしてシーズニング中の蓋材(ポプラ)と響板材(ドイツトウヒ)です。



駒(ベニイタヤカエデ)やリブ(裏面の補強材ドイツトウヒ)を取り付けた響板を張り込んだ後、これは張弦作業中。真鍮製の弦は17~18世紀の失われた技術をとりいれてチェンバロ用に作られたイギリス製。チューニングピンはフランス製。わが工房で使っている唯一の購入(既製)部品です。



同時進行で作ってあった2本のレジスター(シュウリザクラ)、114本のジャック(ヨウナシとヒイラギ)を組み込んで、本体は完成した状態。でも整音、調整作業はまだこれからなのです。



ラテン語の銘文

ポプラこの古の大志、札幌の地に生まれ
2004年嵐によって倒れ
2006年ここに蘇る



北大ポプラチェンバロ 完成図

当初からずっと悩み続けた仕上げ装飾の意匠も、北大のキャンパスカラー緑色で控えめに縁取りをして、やっと、これにて落ち着。見慣れないとすこし変に見えるかもしれませんが、このチェンバロに与えられた諸々の要請を、イタリアンチェンバロの製作伝統と絡み合わせた、横田会心の意匠仕上げです。



北大博物館の一室におさまったポプラチェンバロ

お披露目演奏会の翌朝、北大総合博物館の、だれでも気軽に入れる一隅に納まったポプラチェンバロ。右手前の大きな切り株は、差し迫った倒木の危険を考慮して、あの台風の前に(さまざまな反対意見もあった中)伐採したポプラ。



北大苗畑にて

ポプラ並木の修復用の挿し木を見る。中央が平井教授。今秋この苗を12本いただきました。著者の住む埼玉県滑川町に「大志のポプラ並木」を作る計画です。30年もすると見上げるような並木に、きっとなります。

横田ハーブシコード工房

Tel&Fax 0493-56-2715

y-cemb@k2.dion.ne.jp

<http://www.h4.dion.ne.jp/~y-cemb>